

## 四国八十八カ所巡礼に見る地域文化と地域経済

鈴木孝男

筆者は既に「巡礼と地域経済」(『商大論叢』第52巻第1号, 2014年)において、巡礼に関する筆者なりの概観を述べた。そこでは①巡礼が世界共通に見られる人間の根源的な行動形態の一つであって普遍的な性格を持っていること、②既成宗教に起源を發するものではないこと、③巡礼が次々に新しい巡礼路を生み出す拡散的性格を持つ傾向にあること、の3点について述べた。本稿では四国八十八カ所の霊場巡りについて、地域経済の観点を踏まえて述べると共に(第1章)、巡礼が人間集団(組織)の維持・存続に果たす役割について、ホスピタリティーの観点から考察することにした(第2章)。

### 第1章 四国巡礼と地域経済

#### 1 四国八十八カ所巡礼の成り立ち

四国八十八カ所を巡る巡礼(以下四国遍路あるいは遍路と呼ぶ)は、日本の巡礼文化の中心である。四国霊場を始めたのは弘法大師空海とされる。2014年は開創1200年ということで様々なイベントが行われた。頼富本宏(2009)によると、四国遍路は空海が阿州大滝が岳(徳島県, 21番太龍寺)、土州室戸(高知県, 24番最御崎寺)、石鎚山(愛媛県, 60番横峰寺)など四国の山林や辺地で修行を行い、それを後世の人々が追慕して巡ったことが起こりだという。<sup>(1)</sup>

頼富は、「奈良時代末から、大自然の難所で苦修練行し、しかも精進潔斎をして、それによって心身を清め、世間と出世間にわたる利益・功德を得ようとする浄行」<sup>(2)</sup>こそが遍路の原理だとしている。さらに四国遍路は、辺地修行、補陀落信仰、熊野信仰が融合して形成された、とも述べている。

その後、遍路が普及するのは京都の天皇や公家たちによる熊野参詣の影響があるといわれている。<sup>(3)</sup>さらに西国三十三カ所巡礼(平安時代末期に成立とされる)や鎌倉時代の一遍上人の足跡も四国霊場の形成に影響を与えたという。<sup>(4)</sup>四国遍路の始まりについては、伝承や説話はあるが、記録に残る最も古い事例としては、平安時代後期から末期にかけての『今昔物語』や『梁塵秘抄』に記述があるので、この頃には優婆塞と呼ばれる在家仏教者の集団による四国遍路が行われていたとみるのが妥当なようである<sup>(5)</sup>

広く一般大衆に四国遍路が普及するのは江戸時代になってからで、特に江戸時代中期に

(1) 頼富本宏(2009年) 43ページ

(2) 同書 47ページ

(3) 同書 68ページ

(4) 同書 85～105ページ、佐藤久光(2004年) 22～27ページ

(5) 佐藤久光 前掲書 56～57ページ

宥弁真稔によって書かれた『四国遍路道指南』と真稔らによる道案内の石碑の設置が四国遍路を一般大衆に開放する上で大きな役割を果たした、という。<sup>(6)</sup>

四国遍路は今では広く一般大衆のものとなっている。交通手段が発達するに従い、鉄道や路線バスなどを使った移動が出来るようになると、より多くの人々が巡拝するようになった。戦後の1953(昭和28)年からは伊予鉄道による巡拝バスツアーが始まった。1970年代以降にはマイカーの普及により自家用車での巡拝が一般的になり、さらに本四架橋や高速道路の影響で関西や中国などからの日帰りツアーも盛んになって、四国遍路は大きく様変わりしている。<sup>(7)</sup>

このような四国遍路について、従来は巡礼や広くは宗教社会学などの観点から研究が行われてきている。しかし筆者はこれを地域経済の観点で研究しようと考えた。四国遍路は年にもよるが、毎年10万人を越える人々が四国各地を巡っている。1カ所に10万人ならそれほど多いとはいえないが、全長1200Kmにも及ぶ遍路コースを何日もかけて移動すると、地域経済にかなりの影響を与えることになる。<sup>(8)</sup>

四国遍路に加わる人の多くはバスや自家用車、鉄道などの交通機関を利用するが、5%程度的人是は徒歩で回っている。四国4県は経済的には決して豊かとはいえず、特に太平洋側の地域(徳島南部～高知)にかけては主要産業が農業や漁業などの第1次産業でしかも所得が低いので、四国遍路のように定期的に各地から人々が訪れて宿泊や飲食等で消費をすることは、当該地域にとって一定の経済効果をもたらすのである。<sup>(9)</sup>

## 2 四国における遍路と宿泊業との関係

四国遍路と地域経済の関わりを調べる際に、まず行ったのが宿泊業の調査である。最初に四国4県にどのくらい宿泊所があるかを調べてみた。その際用いたのが「経済センサス」である。この統計により、市町村ごとの業種別事業所数を調べることができるので、データを調べてみた。2012(平成24)年の経済センサスにより、市町村別産業別(産業細分類)の事業所数の数値を見ると、民宿、旅館等の宿舎は「宿泊業」で見ることになるが、四国4県の宿泊業の事業所数は1801軒である。ただし札所の寺院の多くが宿坊を持っており、他に番外札所と呼ばれる準札所の寺院でも宿坊を営んでいるところがあるので、宿泊所はこれより少し多いと思われる。人口が同じ程度の他の県と比較したのが表1であるが、これによると、四国と他の県とでほとんど違いがないことがわかる。例えば愛媛県は567軒であるが、人口が同じ程度の長崎県は694軒である。同じように高知県が477軒であるのに対して福井県は350軒となっている。

このデータだけでは四国4県の宿泊所が他の地域と比較して多いとも少ないともいえないことがわかる。そこで、「遍路道」に沿った各市町村を選び出して、その「宿泊業」数を把握して、各市町村の「宿泊業」の地域特化係数を求めてみた。それが表2である。

ここでは地域特化係数とはある特定の地域に特定産業が集まっている集積の度合いを示

(6) 頼富本宏 前掲書 141ページ

(7) 同書 254ページ

(8) 四国巡礼の参拝者数については、佐藤久光(2004年)第3章第4節などがあり、概数ではおおよそ10万人といわれている。しかし正確な人数は把握できていない。

(9) 『日本統計年鑑』平成28年版によると、高知県の一人当たり県民所得は45位となっている。

すものであり、以下の計算式で求める。

$$\text{地域特化係数} = \frac{\text{特定地域における特定産業の事業所数}}{\text{特定産業の全国の事業所数}} \div \frac{\text{特定地域の事業所数}}{\text{全国の事業所数}}$$

ここでは平成24年版『経済センサス』市区町村別産業細分類別事業所数のデータを用いた。

この場合の特化係数は、産業全体における各地域の事業所数の比率と、その地域の特定業種（この場合は宿泊業）の比率とを比較して、その比率（倍率）を求めてその地域における特定業種の特化状況を把握しようとするものである。

表2は四国4県について、遍路道（宮崎建樹『四国遍路ひとり歩き同行二人』へんろみち保存協会、以下では『同行二人』と呼ぶ）により、歩き遍路が通る道のある自治体を選んだ）が通っている市町村を把握して特化係数を調べ、それと遍路道が通っていない市町村の特化係数と比較したものである。なお、別格霊場や奥の院は除いた。表2でわかるように、県別の平均で見ると、徳島県だけが遍路道沿いの市町村の特化係数が通っていない市町村を上回っている。香川県、愛媛県、高知県においては、むしろ遍路道が通っていない自治体の方が特化係数が高いことがわかる。

このうち特に特化係数が5以上の自治体を並べると表3の6市町村が指摘できる。これらの市町村のデータは全体の数値からみて突出しており、影響が大きいので除外したデータを表2のカッコ内で示した。四国4県の各市町村の宿泊業の特化係数のデータは文末に参考資料として示したので参照願いたい。

表1 四国4県と人口が同程度の他の県との宿泊業の比較

	人口	宿泊業		人口	宿泊業
愛媛	1,374,881	567	長崎	1,366,514	694
香川	972,156	407	和歌山	953,924	540
徳島	750,210	350	佐賀	929,390	303
高知	720,907	477	福井	782,225	350

人口は2015年『国勢調査』を元にした2016年の各自治体のデータによる。宿泊業の事業所数は平成24年版経済センサスによる。

表2 遍路道沿いの市町村とそれ以外の市町村における宿泊業者の県別特化係数

	特化係数	
	遍路道沿い市町村	遍路道が通ってない市町村
徳島	1.44	1.05
香川	0.79	3.82（直島：12.1を除くと1.80）
愛媛	1.15	2.30（伊方：7.5を除くと2.10）
高知	2.22	3.42（大川：21.1を除くと2.10）

経済センサス 平成24年版より作成

表3 四国4県で特化係数が高かった市町村

県名	市町村名	特化係数	遍路道	特徴
香川県	直島町	12.1	非遍路道	島全体をアートの島として演出
愛媛県	伊方町	7.5	非遍路道	伊方原子力発電所が立地
高知県	土佐清水市	5.2	遍路道	観光地であり遠洋漁業の基地でもある
〃	大川村	21.1	非遍路道	ふるさと留学制度で子供を受け入れ
〃	東洋町	8.5	遍路道	サーフィンなどの海洋レジャー盛ん
〃	禰原町	7.0	非遍路道	エネルギー自給率100%超を目指す
〃	大月町	5.4	遍路道	ダイビング、釣りなどの海洋レジャー

上記の7自治体は、それぞれ特色ある地域作りをしており、その結果として当該地域における宿泊業の比率が高くなっているように思われる。一方、遍路宿のように長い歴史の中で作られてきた旅館・民宿などは、周辺地域の生活に根ざした事業となっており、他の産業と密接な関連を持つようになっているので、特化係数が特に高くなっているわけではないと見るべきであろう。

このように、四国遍路と関わりのある産業である宿泊業の事業者については、データを見る限り、遍路道沿いの地域で特に強い影響を受けているとは限らないと見るべきである。

しかし、筆者が実際に遍路道を歩いて観察した結果では、人家の少ない山里に民宿が営業している例がいくつもある。また県庁所在地のような町中でかなり長期にわたって営業を続けている旅館もある。その点から見ると、四国遍路があることで、遍路道沿いにおいて、宿泊業を行っている事業者が継続して営業できる条件が整っているし、この地域においては、遍路宿が数少ないビジネスチャンスの1つとして考えられていると見ることができる。

この点について、『同行2人』においては、巻末に宿泊可能な宿舎をリストアップしているので参考になる。それによると、この書籍で紹介された宿舎は四国全体で771軒（番外霊場を含む、88カ所だけだと690軒）となっている。

経済センサスにある旅館・ホテル数のうち、遍路道沿いにある市町村の数を集計し、『同行2人』の数値と比較してみたのが表4である。

表4 遍路宿の県別比率

	経済センサス	同行2人	遍路宿比率
徳島県	284	146	51.40%
香川県	250	123	49.20%
愛媛県	411	193	47.00%
高知県	299	228	76.30%
4県計	1244	690	55.50%

高知県を除いては旅館・ホテルの約半数が遍路者を主な顧客としている遍路宿であることがわかる。高知県についてはその比率が4分の3と高くなっている。この理由はいくつか考えられるが、高知県の遍路道は札所間の距離が長く、その間にある程度の人口を有する集落が少ないので、遍路宿が存立し、かつ持続しているのではないかと考えられる。

『同行2人』に紹介されている宿舎には、各県の県庁所在地にあるビジネスホテルや著名観光地（道後温泉、室戸岬、足摺岬など）にある観光旅館、各地域の公共の宿も含まれており、遍路を主たる顧客とする宿舎でないもののがかなり含まれている。しかしここに紹介されている宿舎では大なり小なり遍路を泊めていると思われるので、遍路宿として数字を紹介した。

### 3 四国遍路における遍路宿の実地調査

筆者はこの四国遍路について、徒歩により実情を把握し、それが人々の暮らしにどのような影響を与えているかについて調査することにした。全長1200Kmの行程なので、徒歩で回ると早くても40日、遅いと50日程度かかるということがわかっていたので、1回の調査を5～6日として（現地ではこれを区切り遍路と呼んでいる）以下の日程で行った。

第1回	2011年2月4～8日	1番～17番
第2回	3月3～8日	18番～26番
第3回	9月2～7日	27番～35番
第4回	2012年3月7～13日	36番～38番
第5回	9月2～5日	39番～42番
第6回	2013年3月7～12日	43番～49番
第7回	9月2～7日	50番～59番
第8回	2014年3月1～6日	60番～64番
第9回	8月21～25日	65番～79番
第10回	2015年9月4～7日	80番～88番

#### (1) 遍路道と遍路宿

地域経済への影響で取り上げたいのが遍路宿である。10回にわたる「区切り遍路」を行った過程で、41軒の宿舎に泊まった。遍路道沿いには民宿やビジネスホテル、観光客相手の旅館、公共の宿など様々なタイプの宿泊施設がある。この中で筆者は、なるべく遍路宿を選んで泊まるようにした。遍路宿は通常なら事業として成り立たないようなへんびな場所や人通りの少ない場所で営業をしている例があり、遍路の影響を受けやすいと考えたからである。

しかし、場所によってはそうした遍路宿を利用出来ないところもあった。特に徳島、松山など県庁所在地の大都会では、遍路宿を探すことは難しかった。また、歩いている途中で、ちょうどよい場所に遍路宿があるとは限らず、やむなく温泉ホテルやリゾートホテルのような宿舎を利用せざるを得ない場合もあった。ただ、そうした一般観光客向けの宿舎でも、「遍路料金」（場所によっては歩き遍路限定）を設定して積極的に呼び込もうという宿舎もあった。

## (2) 遍路宿の経営

宿舎は分類すると以下の4つのタイプに分けることができる。それは1 遍路宿, 2 ビジネスホテル, 3 観光ホテル, 4 公共の宿である。そこで今回筆者が宿泊した41軒の宿舎を上記の4つに分類してみた。

- 1 遍路宿 31軒
- 2 ビジネスホテル 4軒
- 3 観光ホテル 3軒
- 4 公共の宿 3軒

遍路宿ではできるだけ宿の主人から創業年や経営状況などについてきくことにした。その中で特にめだったのが経営者の高齢化である。31軒中4軒は80歳前後の高齢者が一人で民宿を運営していたが、4～5年先にはやめざるを得ないのではないかというような宿であった。

その反対に最近新規参入してきた遍路宿も3軒あった。そのうちの1軒は経営者夫婦が定年退職後に始めたもので、以前から遍路宿をやってみたいという夢があったようである。定年ではないが、会社を辞めて(いわゆる脱サラ)自分で遍路宿を建てて始めた人もいた。さらに、東京で働いていたが、実家(釣り宿)に戻って一部を改装し、そこで遍路宿を始めたという人もいた。

つまり、遍路宿には世代交代が行われているということである。注目すべきは、定年後の第2の人生の選択肢に遍路宿が入っているということである。また山奥の遍路道沿いでは、善意で遍路を泊めていたが、やがてそれが商売になった、という事例もあった。

## (3) 宿泊先一覧

表5 筆者が宿泊した宿の一覧表

宿泊日	場所	旅館名	特徴
① 2011・2・4	鳴門市 かどや椿荘		創業は1904年(明治37年)。霊山寺前の遍路宿。冬期は開業せず、2月から営業を始めるという。回廊式で中庭のある作りとなっている。この方式は他の遍路宿でもいくつか見られた。
② 2・5	阿波市 御所温泉観光ホテル		普通の温泉ホテル。札所までの送迎をしてくれるので宿泊した。現在休業中。
③ 2・6	吉野川市 旅館吉野		小さな遍路宿(比較的新しい建物だった)。他の宿泊者と食事時に交流ができて貴重な体験となった。
④ 2・7	神山町 植村旅館		遍路道沿いの昔ながら遍路宿。以前はもう少し山奥だったという。
⑤ 2011・3・3	小松島市 民宿千葉		遍路宿。恩山寺のすぐ下にある。他の宿泊者との交流ができた。
⑥ 3・4	阿南市 龍山荘		普通の遍路宿。太龍寺の住職の勧めもあって始めたという。 <sup>(10)</sup> 現在は廃業したようだ。

(10) 浅川泰宏(2008年) p115

⑦	3・5	阿南市 きよ美旅館	通常は寿司屋を経営。宿も持っている。
⑧	3・6	海陽町 遊遊NASA	少し大きなホテル。歩き遍路用料金があった
⑨	3・7	室戸市 ロッジおざき	つり宿としても事業を行っている。
⑩	2011・9・2	室戸市 民宿うらしま	遍路宿。台風上陸で風雨共に強く、歩行に危険を感じたので、泊めてもらった。歴史等のインタビューは行っていない。
⑪	9・3	安田町 民宿きんしょう	遍路宿。もともと結婚式場であったものを改装。
⑫	9・4	香南市 住吉荘	海鮮料理の飲食店を兼ねる遍路宿
⑬	9・5	香南市 遊庵	大日寺で教わって泊まる。この宿は歩き遍路のためになり遠くまで送迎してくれる。つまり荷物を預かり、行けるところまで行ってから宿に連絡する。次の日は前日迎えを頼ん場所に送ってくれる。この遍路宿は2011年にできたようで、経営者夫婦が退職を機に以前からやりたかったという遍路宿を開業したそうだ。
⑭	9・6	高知市 高知屋	1950年開業。現在の女将は2代目で70歳代と思われる。建物はきれいで料理にも凝っている宿
⑮	2012・3・7	須崎市 民宿なずな	もともとつり宿であったが、息子が東京からUターンして建物を増築して遍路宿を始めた。料理は目の前の海(横波3里)でその日に捕れた魚を出してくれる。
⑯	3・8	中土佐町 福屋旅館	40年前に現経営者の親が買い取ったそうだ。元々は材木商をやっていたようだ。『釣りキチ三平』の作者である漫画家の矢口高雄がこの宿に滞在して作品を書いたそうで、その原画が部屋に飾られていた。
⑰	3・9	黒潮町 土佐佐賀温泉こぶしのさと	第3セクターの施設のようだ。公営の宿という雰囲気がある。遍路料金あり。
⑱	3・10	四万十市 四万十の宿	JR四国の経営で歩き遍路料金があった。かなりハイセンスなホテル。遍路用ではないが、場所の関係で選ばざるを得なかった。翌日四万十川の渡し船に乗れたのでこの宿は好都合だった。
⑲	3・11	土佐清水市 ペンションサライ	もともとペットと泊まれる宿として開業していたものを現経営者が1年半前に購入した。現在はペット同伴と遍路宿の半々で営業している。オーナーは病院の調理師と漁師を経験。夫人は元看護師
⑳	3・12	三原村 農家民宿風車	どぶろく特区政策の一環として始められた宿で、経営者が自宅を新築する際に元の自宅を改装して長期滞在できるようにした宿。経営者は地元で建設業を営んでいる。自炊もできるが自分が経営している食堂で朝夕食を出してくれる。この農家民宿というスタイルは、今後の滞在型観光で重要な役割を果たすように思われた。
㉑	2012・9・2	宿毛市 岡本旅館	宿毛の中心部にある古い遍路宿で、あと3～4年で創業100年になるという。女将一人で切り盛りしている宿だが、年齢が80歳近くになっていて、今後の継続が危ぶまれる。子供達は東京で生活しているそうだ。

②②	9・3	愛南町 旭屋	漁港前の食堂兼民宿。国道沿いの食堂で民宿を兼ねてる。
②③	9・4	宇和島市 宇和島リージェントホテル	市内のビジネスホテル。遍路宿を探したが、やっていないか食事なしということだったのでここにした。
②④	2013・3・7	宇和島ステーションホテル	翌日の行程を考えて、ここにした。普通の駅前ホテル。歩きは翌8日から始めた。
②⑤	3・8	大洲市内 松楽旅館	市内中心部にある古い旅館で、行った時は改装工事をしていた。周囲は古い町並みが残っているが、商店街は全くのシャッター通りで寂れていた。経営者はかなり高齢。
②⑥	3・9	内子町 さかえや旅館	遍路宿 古い建物でかなり痛んでいるが、改装した様子は見えない。歩き遍路にとっては便利な場所にあるので利用者があるようだ。歩き遍路はこのところ減っているとのことであった。
②⑦	3・10	久万高原 おもご旅館	明治時代に作られた古い旅館で、部屋の造作が伝統的 日本建築の形を残していてすばらしかった。猿の腰掛、黒柿、箱根細工など。遍路宿の他にラグビーの合宿所としても利用されている。
②⑧	3・11	松山市 長珍屋	長珍屋は遍路宿では珍しい団体受け入れ可能な大型旅館。現在の経営者は5代目で、それ以前はわからないということで、かなりの歴史を有する旅館である。定員は250人だったが現在では200人となっている。経営者はかつては住職だった。彼によると、遍路は一般の旅館では泊めなかったそうだ。全体にお遍路さんが減っていて、宿泊する人も減っているという。バスを使った日帰り客が多いのだという。ただ、学生で遍路をする人は増えているという。
②⑨	2013・9・2	道後温泉 にぎたつ会館	公立学校共済組合が経営する旅館。道後温泉に近い。
③⑩	9・3	松山市 清泉フォンテーヌ・ペンション	1970年代に現経営者の親が開業。今の女将は新体操の草分け時代の選手だった人で、今でも地元で教えている。敷地から出た鉱泉を湧かして提供している。遍路道からは少し外れているが依頼があれば国道まで迎えに出るなどで遍路者を集めている。
③⑪	9・4	今治市 笑福旅館	50年ほど前に立てられ、現経営者の両親が40年まえに購入して引き継いで始めたもの。経営者夫婦はかなりの高齢で2階の客室に上がるのが厳しいという状況だ。今後続けられるかが問題だ。
③⑫	9・5	今治市 ホテルアンジュール	昭和50年代に開発された温泉で、温泉ホテルがいくつか並んでいる。温泉ホテルとしての風情はなく、ただの宿泊施設という印象である。遍路料金はなかった。
③⑬	2014・3・3 3・4	西条市 京屋支店	社長の伊藤隆治氏の話によると、父親は建設業母親の実家が石鎚山麓での旅館であった。最初に石鎚山ロープウェイ入口で旅館を始め、10年後の昭和58年に支店を現地に作った。宿泊定員140人と遍路宿としてはかなり多く、団体が多く利用する。遍路人口が半減(16万人→8万人)。講が減って旅行会社の団体ツアーが増えている。本四架橋の影響で、日



		帰り客が増えて旅館に宿泊する客が減少している。旅館のある場所は、横峰寺に上がる小型バスの発着所となっており、大型観光バスできた団体は必ずここで乗り換えなければならない。この条件があるので団体客が利用しやすくなっているのだろう。
③④	3・5	新居浜市 ビジネスホテル MISORA   新居浜のはずれにある長期出張者ホテル。特に遍路用ということではない。
③⑤	2014・8・21	四国中央市 一野屋旅館   大正5,6年頃創業 先祖は今川義元の家臣で織田信長に敗れた後落ち延びてここに来たとのこと。工事関係者の長期在者が多かったが、今は夫人が病気のため、遍路限定で営業している遍路宿。
③⑥	8・22	観音寺市 民宿青空   10年前に古い民家を買って夫婦で始めた。経営者夫婦は元々二人とも会社員であったが、脱サラして遍路宿を始めた。二人とも遍路をしていたことが開業の動機という。
③⑦	8・23	三豊市 ほ志川旅館   3代前から営業している遍路宿。かつては利用者が多く、部屋数も多くて大規模にやっていたが、夫に先立たれ、今は小規模に運営している。この先あと何年続けられるか、というところだろう。
③⑧	8・24	丸亀市 アパホテル   全国チェーンのビジネスホテルを利用するのは今回が初めて。特に遍路を意識したサービスを行っているわけではない。
③⑨	2015・9・4	高松市 巡彩庵   もともと高松市内でそば屋をやっていた。7年ほど前に事情があってその店をたたみ、現在地に移って宿泊のできるそば屋として営業している。今はご主人が病気で女将が一人で宿を経営している。山の中腹にあり、瀬戸内海の見晴らしがすばらしい宿だ。根香寺からの送迎をしている。今回は時間の関係で白峯寺まで迎えに来てもらった。遍路宿である。
④⑩	9・5	高松市 ホテルローヤル屋島   屋島の前にあるビジネスホテル。長期出張者用のようで、お遍路中心ではなかった。遍路向けの特別のサービスはなかった。
④⑪	9・6	さぬき市 旅館ながお路   長尾寺門前にある遍路宿の一つ。地図では3軒あることになあることになっているが、1軒は営業してないので2軒になっている。ここにある遍路宿がいつからあるのかは不明だそうだが、現在の経営者がこの宿の経営を始めたのは平成元年から。それ以前は仕出し屋をやっていた。今の経営状況はよくないようだ。2014年は四国霊場開創1200年でかなり人が来たそうだが、2015年に入ってから大幅に減少している。経営が厳しく、経費節約に努めているがたいへんだそう。この方は、88カ所を回った後に1番に戻るということについても批判的であった。四国霊場は循環型ではないということだ。

今回確認をしたところ、41軒の宿泊先のうちで、既に何らかの事情で廃業している宿舎が2軒あった。すべて確認しているわけではないので、正確なところは不明であるが、2011年～2015年の間に泊まった宿でこの6年の間に事業活動を終えたところが2軒あるという。小零細経営が多いので、事業を継続することは難しいのであろう。一方この間に新規

参入した宿が何軒あるのかは不明である。

全国チェーンのホテルや公共の宿など、法人経営の所を除いて、個人経営の宿で聞いた話や筆者の体験を総合すると、次の5点を指摘することができる。

- (1) 経営者の高齢化と単身化
- (2) 遍路宿に対する先行きの見通しの暗さ
- (3) 遍路宿相互の連絡体制の弱さ
- (4) 遍路宿における世代交代
- (5) 遍路宿という場の持つ重要性

(1) については上記の表5で明らかである。80歳前後の高齢者が一人か二人で営業をしている宿が3軒あった。これらの宿が現在経営しているかどうかは不明であるが、ここ5年以内の営業をやめるところが出てくる可能性が高い。またその予備軍もかなりある。多くの遍路宿が将来の見通しの暗さから、今の経営者の代で終わりにしようと考えているような雰囲気があるのである。それはこれらの宿を利用して、後継者がいる様子がかげえないことからいえるのである。

(2) 歩き遍路の人が多く利用する遍路宿で、弱気の見通しをもつ宿が多かった。2015年の四国遍路開創1200年のキャンペーンのあとになって、客足が落ちたとのべる宿の主人が多かった。団塊の世代が退職して、そのうちのわずかでも四国を歩くのではないかと言う期待が地元にはあったが、それを実感できてないというのが実情のようである。

本四架橋や高速道路の開通などで四国を訪れる観光客は増えているかもしれないが、遍路への関心は一部にとどまっているのかもしれない。

(3) 遍路宿の主体は個人経営の旅館・民宿・ペンション等である。これらの宿泊事業者たちのなかで、グループを作ってチラシを作ったり看板を立てたりして遍路者に呼びかける活動を行っている宿はあるようだ。しかし、四国全体の遍路宿のネットワークはできていない。これらの事業者達が連携して、遍路(特に歩き遍路)を増やす取り組みをすることが必要であると思われるが、組織すらないのが実情のようである。

そもそも零細な個人事業者がほとんどなので、会費を集めて組織を作るということは難しいであろう。震災後、一時期減っていた外国人遍路が増えているようなので、高齢者への呼びかけも併せて何らかの取り組みを行うことが求められているように思われる。霊場会という寺院の組織があるようなので、そことのつながりを持ちながら、何らかの連携を行っていくことで、四国88カ所の価値が高まるものと思われる。

(4) 上記の遍路宿の紹介でも述べたように、今回宿泊した宿で新規参入した遍路宿が3軒あった。若い人の場合もあるし、定年退職後に始めた人もいたので高齢者から若手に代わったと言えないところもあるが、世代交代が進んでいると見ることができる。宿泊しなかった遍路宿の中で、車でへんろ道を「逆走」し、歩き遍路をみると今晚の宿泊を勧誘する「営業活動」をしているところがあった。また、札所の寺院に頼んで紹介してもらうようにしている宿もあった。その意味では遍路宿間に適当な競争があると見ることができる。

(5) の遍路宿の場については、実際にいくつかの遍路宿で非常に興味深い経験をしたので取り上げてみる。遍路宿は例外を除いて小規模で、宿泊定員はおそらく10人前後かと思われる。筆者が実際に泊まった際は、5～6人程度が多かった。

歩き遍路の場合、宿に着くのは午後4時～6時で、食堂と一緒に食事を取った。同宿者は

遍路をしているので目的が同じであり、しかも毎日歩いて札所を回っているので情報交換やお接待の経験など共通の話題が多く、すぐに親しく話をするができる。その際、アルコールが入っていると、お互いになぜ遍路をしているのかという「動機」を話すようになる。この話はそれぞれ人生の様々な課題をしょっており、そこでの話は普通では聞けない深い内容になることがあった。

普通の旅行であれば、たまたま同じ旅館に泊まったからといって、よほどのことがない限り会話をすることは少ない。ましてお互いの人生の機微に触れることを、初対面で話すことはあり得ないであろう。しかし遍路者同士の会話ではそれが自然にでてくるのである。筆者の経験では、4人の男同士で話しているうちに、2人が妻に先立たれて遍路に出たということ話を話していた。こうした深いコミュニケーションが成り立つのが遍路宿という場の特徴なのである。

## 第2章 四国遍路にみるお接待文化

### 1 お接待の歴史

お接待は四国遍路を語る上でなくてはならない重要な要素の一つである。四国遍路が弘法大師信仰と密接に結びついていることから、大師をしたって八十八カ所の札所巡りをする遍路者（お遍路さん）をもてなす（大切にす）という風習がこの地域に根付いたのであろう。お接待の成り立ちに関連が深いとされる「衛門三郎伝説」<sup>(11)</sup>が影響を与えた、とする見方もある。

#### 衛門三郎伝説

衛門三郎は伊予国の領主河野一族に連なる豪農であった。ある時彼の家の前にみすばらしい身なりの僧が立ち、托鉢を乞うた。しかし三郎はこの僧を追い払っただけでなく、ほうきで打ち据えた。その時僧が持っていた鉄鉢が落ちて八方に散り、僧の姿も消えた。三郎には8人の子供がいたが、事件のあった翌日から子供が1日に一人ずつ病気で亡くなり、8日目には一人もいなくなってしまった。

三郎は僧が弘法大師だと知り、大師にお詫びをしようと妻と別れ、四国中を20周回ったが会うことができない（これが八十八カ所巡礼の起こりといわれる）。そこで今度は逆に回ろうと思って8回ったところで力尽き倒れてしまった。そこに弘法大師が現れ、三郎を許して最後の望みをかなえてあげようと言ったところ、三郎は河野一族の家に生まれ変わって人生をやり直したいといったので、大師はそばにあった小石に「衛門三郎再来」と書いて三郎に握らせると、三郎はその場で息を引き取った。そこで大師は三郎の遺体を埋葬し、持っていた杖を墓標としてそこに立てると、杖はのちに大木となった。これが現在12番札所となっている焼山寺の麓にある杖杉庵の起源である。

その後数年たって伊予国の領主河野氏に男の子が生まれた。息利（やすとし）と名付けられたこの子は、生まれたときから左手が握られたままであった。そこで河野家の祈願寺である安養寺の僧に加持を命じたところ、手が開いてそこから小石が出てきた。この石には文字が書いてあり、読むと「衛門三郎再来」と書かれてあった。のちに息利は伊予国の太守となり、安養寺を再興して石手寺と改め、その小石を納めたという。

(11) 衛門三郎伝説については頼富本宏 前掲書 106～107ページを参考にした。



11 番焼山寺の麓にある杖杉庵にある弘法大師と衛門三郎の像

巡礼者を接待する風習は四国だけではなくて世界各地に存在する。日本でもお伊勢参りで集まる巡礼者をもてなす慣習が伊勢に通ずる街道に残っている。<sup>(12)</sup> 四国はこうした風習が色濃く残っている地域として特徴があるが、四国だけの特異な現象というわけではないのである。

巡礼者へのもてなしをするのはなぜだろうか。ヨーロッパで見られるもてなしの例としては、巡礼者用の宿の提供がある。巡礼があったとされる古代から中世にかけて、ヨーロッパの著名な巡礼路（エルサレム、ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラなどに向かう道）の沿道には、宿があった。シュピタール、オスピタル等と呼ばれるこうした宿舎は、寝床と敷き藁を提供するだけの簡素なものが多かったが、それでも巡礼者にとってはたいへんな恩恵であった。当時、一般人の旅行はほとんどなく、今のようなホテルはなかった。それに代わるものとして、修道院が宿舎を提供したり巡礼宿が設けられたのである。

見知らぬ人を泊めることは、その家の主にとってリスクの大きいことであった。いわば外敵を自宅に呼び入れるようなものとして受け止められるので、外部の旅行者等を受け入れる施設を持つことは危険負担の回避に役立つものであった。

## 2 四国のお接待の実情

現代の四国のお接待は宿舎の提供だけでなく、札所から札所までの間の休憩や道案内、道路の整備などを行うものである。集団（接待講のようなもの）もあれば個人で行うものもある。筆者が経験したものでは、地域住民が定期的に接待を行う例（毎週1回のように）や企業が自社の敷地の一角に接待小屋を設けて休憩をさせてくれるところもあった。さらに国道を歩いている時、歩行者（主として歩き遍路）用の歩道や横断歩道を整備している場所があった。ロータリークラブや商工会議所等の経済団体が休憩所の建設などでお接待を行う例もあった。

地元の子供達のお遍路さんへの気配りも見られた。小学生から中学生、高校生くらいの若者が、すれ違いざまに声をかけてくれることはごく普通に行われていた。県庁所在地のような都市部と地方とでは温度差があり、地方のほうがしっかりとお接待が行われていた。

四国八十八カ所霊場は四国の重要な観光資源であり、お遍路さんは大切なお客様である。また、古くからの言い伝えで、お遍路さん（特に歩き遍路）は弘法大師の化身で、お遍路さんにお接待をすることが自分にとって功德を積むことになる、という文化が四国の人々の心の中に溶け込んでいて、代々引き継がれているという印象を持った。このような地域独自の価値観を持っているということは、地域文化の一つとして重視する必要がある。

(12) 鎌田道隆（2013年） 特に第5章

お接待を受けた遍路のほうの意識はどうであろうか？筆者のように初めて四国遍路をした人間は、とにかく驚くことが多かった。いきなり飲み物や食べ物を差し出されたりお金を渡されたり、喫茶店で注文したコーヒーが無料になったり、食堂でおかずが1品おまけでついてきたりと、毎日のように何らかのお接待を受けながら歩いてきた。地元の方々によるお接待という見返りを求めない善意に触れることはたいへん重要な経験であった。今まで経験したことのない感謝と感動の気持ちに浸ることが何度もあった。

お遍路さんはお接待を受けることで地域の人々に受け入れてもらえた、という精神的な充実感を得るのであるが、客観的にはそれはお遍路さんの「錯覚」である。接待する方は単に自分の功德を積むことが目的であるが、受ける方はそれを無償の善意が自分に対して示されたということを受け入れられたという錯覚に陥り、それまでの日常生活では味わうことのできない不思議な感動を覚えるのである。

こうした錯覚は重要な意味を持つ。人間は集団の中で生活しているが、家族や企業などで分断され、周囲の人々とお互いに関心を持つことが少ない。そのような環境の中になると、集団から疎外され、あるいは無視されて、満ち足りた時間を過ごすことが少なくなる。集団内部の人々との交流も不十分になってしまう。

これに対してお接待を受けたときの気持ちは、まさに上記と逆の状態である。地元の人々と初対面であるにもかかわらず、いきなり交流ができた（と感じる）のである。また自分の存在を地元の人に認めてもらったという気分になることができる。これはお遍路さんの誤解であるが、それに気づいた場合でも気持ちが高揚するのである。

企業などで仕事をしていて、自分の存在を認めてもらうことはそれほど多くはないであろうから、知らない人に認めてもらい、「信じてもらえる」という経験をするのは日常生活ではなかなかないことだ。こうした経験をすることで、生きていくことの喜びを感じたり、人間を信じることができたと感じたりするなど、それまでに経験したことのない感動を味わう人が多い。

筆者も四国を歩いて様々なお接待に接し、心温まる思いを何度もしたし、時によっては涙腺がゆるむこともあった。旅行をしていて行った先の地元の方とのふれ合いがあることは旅の楽しみの一つであろうが、四国遍路のお接待はそれにとどまらない大きな力を持っている。しかもそれが四国全体で広く行われているところに地域文化としての「お接待」の奥深さ、すばらしさがあるのである。

### 3 お接待の事例

四国を徒歩で一周する間に様々なお接待を受けた。その中からいくつか印象に残った事例をあげてみたい（348ページの写真①～④）。

①は年配の女性が海岸の避難施設（おそらく津波用と思われる）を利用して、週に1回実施しているものである。施設の前を通る歩き遍路に呼びかけて招き入れ、飲み物やお菓子などを振る舞ってくれるし、話し相手にもなってくれる。この活動の起源はわからないが、古くからある接待講の名残の可能性もある。

②の接待所は芸西村の栗山さんという方が個人で作ったもののように、建物自体は丈夫とはいえないが、歩いて回っているお遍路さんのつかれを癒やしてさしあげよう、という気持ちのあふれた人形が置かれてあり、壁には歩き遍路に対する感謝や激励の言葉や絵などが貼られている。ここを尋ねたときはだれもいなかったが、暖かい気持ちが伝わってき

て、大いに癒やされた。

③は6番札所近くの住宅にあった「小さなお接待所」の様子である。お茶にお菓子がおいであり、だれでも利用出来るようになってきている。このような個人(や企業)が行っているお接待所は四国各地の遍路道沿いに存在している。単に椅子だけが置いてあるものから、部屋を開放して入れるようになってきているものまで様々である。

④は日和佐から牟岐に向かう国道55号線にあった交通安全を呼びかける標識である。道路の歩道部分に緑色のラインが引かれており、歩き遍路はそこを通るように呼びかけている。おそらく以前この付近で事故があり、お遍路さんがそれに巻き込まれたことを受けての措置と思われる。これが地元警察と道路管理者(国)の「お接待」である。

その他様々なお接待があり、歩いている間中はほぼ毎日のように経験することができた。お接待は遍路者のみに対する善意だけではない。地元の人どうしのあいだでも、ちょっとした感謝の気持ちを表す際に用いられているようだ。四国全体に、こうした気遣いの精神が保存され、受け継がれていると感じられる。その意味でお接待は四国の地域文化として埋め込まれているといえよう。

このほかにも多数のお接待があり、それらがお遍路さんを後押しして苦しい峠越えや車の往来が激しい国道などを歩き通す力になっている。そしてこのお接待という地域文化があることが、四国88カ所の札所巡りを今日まで持続させてきた大きな要因になっているといえよう。

① 23番薬王寺の近くにある田井ノ浜で接待をしている女性グループ



② 高知県芸西村の栗山英子さんという方が作った接待所の内部の様子



③ 遍路道沿いの住宅で用意した小さな接待所



④ 国道で遍路の安全への配慮を呼びかける案内標識



#### 4 四国遍路の影の部分

これまで四国88カ所札所巡りのお遍路について、辺境の地域に一定の経済効果があること、お接待という独特の地域文化が定着していること、遍路をする側に大きな精神的効用が期待できることなどの肯定的な側面を述べてきた。

しかし遍路には影の部分がある。具体的には病気、貧困、犯罪などでそれまで暮らしていた地域社会から排除された人々が逃げ込んでくることである。四国ではこれらの遍路者を辺土（ヘンド）と呼んで通常の遍路と区別したりあるいは遍路全体を避ける傾向が一部地域に見られる。筆者が歩いた際にも、そういう話をいくつか聞いている。遍路宿についても、一般の旅館は遍路を泊めなかったので、遍路専用の遍路宿ができたという話を聞いた。さらに最近でも、犯罪者が身を隠すために四国を回ったという事実が報道された。<sup>(13)</sup> また、何らかの問題を引き起こしてその謝罪のために四国遍路に出るという例もある。

その意味で、四国遍路は単なる宗教上の修行、信仰心、功德、悟りを開く、などの肯定的側面だけでなく、社会の影の部分を表すこともある。筆者の経験でも、病気の人には会わなかったが（あるいは気づかなかっただけかもしれない）、遍路乞食と思われる人に会ったことはある。これらの人は家には帰らず（あるいは帰るべき家がないのかもしれない）四国を歩き続けているのである。

このうち病気に関しては、不治の病に犯されたということで医者から見放され、最後に一縷の望みを託して四国に来る人がいるようだ。第3番札所の金泉寺の奥の院である愛染院は、腰から下の病に効能があるといわれ、境内にはご利益により（？）使われなくなった松葉杖やコルセットなどが多数奉納されていた。同様のご利益がある札所として、71番弥谷寺にもコルセットなどが奉納されているという。かつて誤った認識により社会から隔絶されたハンセン病の患者の中には、行き場がなくなって四国を回る人もいたようだ。

障害者になった人が回るケースもあった。足が不自由になって、「いざり車」によって四国を回った人がいたが、こうした遍路が現れると地元の人が、早く自分達の村を通過して他の村に行つて欲しいということで隣村の境までいざり車を押して連れて行き、多少の金品を与えて通過させたという事例があったようだ。これを「送り遍路」と呼んでいた。<sup>(14)</sup>

また貧困に関しては、職業遍路と呼ばれる人達の存在が指摘されている。職業遍路は乞食遍路とも呼ばれ、貧しさ故に故郷で食べていくことができず、四国にわたってお接待を当てにして生活していたのである。乞食遍路はヘンドと呼ばれていたことがあり、これらの人々が通常の遍路に対するお接待に便乗してそれに頼って生きていたとの指摘もある。浅川泰宏（2008年）によると、遍路道をそれた地域にヘンドが現れて托鉢をする例があったという。<sup>(15)</sup>

こうした事例もあって、遍路に対して地元の人々が常に好意的であったというわけではない。江戸時代から遍路を取り締まりの対象にしていた藩が存在した。頼富本宏（2009年）によると、土佐藩では遍路が土佐藩を通過する日数を30日以内に制限したり、竇路道以外

(13) 2007年市川市でイギリス人英会話講師が殺害された事件で、捕まった犯人が逃亡中に身を隠すために四国を回っていたという。

(14) 頼富本宏 前掲書 218ページ

(15) 浅川泰宏 前掲書 341～396ページ

の脇道に入ることや高知城下に入することを禁止した。<sup>(16)</sup>

四国各藩による入国規制の例としては、伊予松山藩が1658年頃に巡礼者の立ち入り規制を行っているほか、江戸時代に領内への立ち入り規制が約70件も出されているという。<sup>(17)</sup> さらに土佐藩のように接待禁止を行ったところもある。<sup>(18)</sup>

接待禁止の理由の中には、ヘンドによる窃盗などの犯罪の発生や外部からの侵入者の排除の他に、地域農民の暮らしが豊かになるにつれて、接待にかこつけて贅沢をするという傾向があると藩が捉えていたことが含まれている。

このようにお接待は、それに依存して生きようとする弱者が四国に集まってくるという意図せざる結果をもたらしてきた。この現象は現在でも残っている。例えば社会的に非難を浴びた人が、反省や謝罪の意味で遍路に出ることがある。四国の人々は、そうした「弱者」を受け入れることも含めて、お遍路さんの信仰を支えてきたのである。

## 5 小括

ここまで四国遍路について、地域経済と地域文化の視点から分析をしてきた。経済的効果に関しては、遍路宿がどの程度存在しているかということで、地域特化の視点から見てきたが、地域経済への影響についてデータで示すことはできなかった。ただ廃業する宿がある一方、新規参入する宿があることも確認できたので、遍路道がある限りは地域経済に何らかの影響を持ち続けることができることを確認出来たと思う。

一方お接待については、四国独自の地域文化としてその存在が重要な意義を持っていることを確認できた。四国遍路をした経験者が様々な手記を残しているが、それらにおいても道中での地元の人々からのお接待が強い印象として示されている。

筆者はこのお接待について、組織マネジメントの分野においても重要な影響力を持っていると考えており、この点については近いうちに新たに稿を起こして明らかにしていきたいと考えている。

## 参考文献

- 1 浅川泰宏『巡礼の文化人類学的研究』古今書院, 2008年
- 2 鎌田道隆『お伊勢参り』中公新書, 2013年
- 3 佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』人文書院, 2004年
- 4 森正人『四国遍路』中公新書, 2014年
- 5 頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川書店, 2009年
- 6 宮崎建樹『四国遍路ひとり歩き同行2人』遍路道保存会, 2013年

---

(16) 頼富本宏 前掲書 218ページ, 浅川泰宏 前掲書 239～247ページ

(17) 森正人(2014年) 122ページ

(18) 浅川泰宏 前掲書 247～255ページ



参考資料 四国4県市町村別宿泊業の特化係数 平成24年経済センサスより

四国4県, 市町村	全産業 (公務を除く, を含む)	M 宿泊業, 事業内容等不詳	75 宿泊業 飲食サービス 業	751 旅館, ホテル	特化係数
全 国	5,768,489	711,733	52,045	41,592	
徳 島 県	39,217	4,598	350	312	0.989
徳 島 市	15,477	2,178	104	96	0.745
鳴 門 市	2,979	353	36	32	1.339
小 松 島 市	1,752	204	11	10	0.696
阿 南 市	3,402	348	46	42	1.499
吉 野 川 市	2,048	225	17	17	0.920
阿 波 市	1,371	117	4	4	0.323
美 馬 市	1,478	147	12	8	0.900
三 好 市	1,684	174	36	31	2.369
勝 浦 郡 勝 浦 町	276	18	2	1	0.803
勝 浦 郡 上 勝 町	102	8	3	3	3.260
名 東 郡 佐 那 河 内 村	97	5	-	-	
名 西 郡 石 井 町	1,196	110	2	2	0.185
名 西 郡 神 山 町	350	33	10	6	3.167
那 賀 郡 那 賀 町	532	60	14	11	2.917
海 部 郡 牟 岐 町	330	32	6	6	2.015
海 部 郡 美 波 町	425	50	9	8	2.347
海 部 郡 海 陽 町	591	65	15	14	2.813
板 野 郡 松 茂 町	588	75	9	8	1.696
板 野 郡 北 島 町	867	82	2	1	0.256
板 野 郡 藍 住 町	1,507	139	2	2	0.147
板 野 郡 板 野 町	490	43	2	2	0.452
板 野 郡 上 板 町	448	21	2	2	0.495
美 馬 郡 つ る ぎ 町	522	37	3	3	0.637
三 好 郡 東 み よ し 町	705	74	3	3	0.472
香 川 県	50,047	5,749	407	355	0.901
高 松 市	23,105	2,774	142	114	0.681
丸 亀 市	4,635	602	17	16	0.407
坂 出 市	3,132	299	28	28	0.991
善 通 寺 市	1,562	211	21	19	1.490
観 音 寺 市	3,263	331	19	16	0.645
さ ぬ き 市	2,109	230	17	15	0.893
東 か が わ 市	1,638	176	13	12	0.880
三 豊 市	2,975	269	20	18	0.745
小 豆 郡 土 庄 町	982	131	39	35	4.402
小 豆 郡 小 豆 島 町	1,089	102	23	22	2.341
木 田 郡 三 木 町	1,021	83	3	2	0.326
香 川 郡 直 島 町	211	53	23	22	12.082
綾 歌 郡 宇 多 津 町	846	120	9	8	1.179
綾 歌 郡 綾 川 町	998	94	1	-	0.111
仲 多 度 郡 琴 平 町	775	97	19	19	2.717
仲 多 度 郡 多 度 津 町	861	102	8	5	1.030

四国4県, 市町村	全産業 (公務を除く, を含む)	M 宿泊業, 事業内容等不詳	75 宿泊業 飲食サービス 業	751 旅館, ホテル	特化係数
仲多度郡ま んのう町	845	75	5	4	0.656
愛媛県	68,510	7,863	567	478	0.917
松山市	23,100	2,874	164	138	0.787
今治市	8,986	1,055	74	68	0.913
宇和島市	4,791	626	43	34	0.995
八幡浜市	2,288	247	23	17	1.114
新居浜市	5,547	673	29	22	0.579
西条市	5,078	572	42	36	0.917
大洲市	2,666	313	22	17	0.915
伊予市	1,585	123	7	7	0.489
四国中央市	4,549	422	28	20	0.682
西予市	2,202	187	19	18	0.956
東温市	1,226	121	4	3	0.362
越智郡上島町	340	34	10	10	3.260
上浮穴郡久 万高原町	508	51	17	12	3.709
伊予郡松前町	1,261	97	-	-	
伊予郡砥部町	884	71	2	2	0.251
喜多郡内子町	941	96	11	11	1.296
西宇和郡伊方町	535	67	36	28	7.458
北宇和郡松野町	178	15	1	1	0.623
北宇和郡鬼北町	513	37	4	4	0.864
南宇和郡愛南町	1,332	182	31	30	2.580
高知県	38,378	5,659	477	414	1.378
高知市	17,868	2,622	137	103	0.850
室戸市	873	143	19	18	2.412
安芸芸市	967	143	7	7	0.802
南芸市	2,011	215	8	7	0.441
土佐市	1,138	146	4	4	0.390
須崎市	1,287	205	18	17	1.550
宿毛市	1,464	236	30	29	2.271
土佐清水市	987	175	46	45	5.166
四万十市	2,397	491	55	47	2.543
香南市	1,267	189	8	5	0.700
香美市	1,211	152	7	6	0.641
安芸郡東洋町	157	24	12	11	8.472
安芸郡奈半利町	213	47	1	1	0.520
安芸郡田野町	169	14	1	1	0.656
安芸郡安田町	134	15	2	2	1.654
安芸郡北川村	46	5	1	1	2.409
安芸郡馬路村	49	7	2	2	4.524
安芸郡芸西村	152	14	3	3	2.188
長岡郡本山町	204	21	2	2	1.087
長岡郡大豊町	230	27	7	4	3.373
土佐郡土佐町	225	23	3	3	1.478

四国4県, 市町村	全産業 (公務を除く, を含む)	M 宿泊業, 事業内容等不詳	75 宿泊業 飲食サービス 業	751 旅館, ホテル	特化係数
土佐郡大川村	21	5	4	4	21.112
吾川郡いの町	982	141	12	10	1.354
吾川郡仁淀川町	344	39	10	9	3.222
高岡郡中土佐町	383	54	5	4	1.447
高岡郡佐川町	524	80	4	4	0.846
高岡郡越知町	332	36	1	1	0.334
高岡郡禰原町	238	45	15	13	6.985
高岡郡日高村	213	25	-	-	
高岡郡津野町	275	36	7	7	2.821
高岡郡四万十町	1,026	152	22	22	2.377
幡多郡大月町	308	35	15	13	5.398
幡多郡三原村	100	13	1	1	1.108
幡多郡黒潮町	583	84	8	8	1.521

(2017.1.22 受稿, 2017.2.8 受理)

## 〔抄 録〕

筆者は既に「巡礼と地域経済」(『商大論叢』第52巻第1号, 2014年)において, 巡礼に関する筆者なりの概観を述べた。そこでは①巡礼が世界共通に見られる人間の根源的な行動形態の一つであって普遍的な性格を持っていること, ②既成宗教に起源を發するものではないこと, ③巡礼が次々に新しい巡礼路を生み出す拡散的性格を持つ傾向にあること, の3点について述べた。本稿では四国八十八カ所の霊場巡りについて, 地域経済の観点を踏まえて述べると共に(第1章), 巡礼が人間集団(組織)の維持・存続に果たす役割について, ホスピタリティーの観点から考察することにした(第2章)。